

伝承活動が地域における子育てに及ぼす影響について ～草津市下笠町における事例研究～

永井美紗*・黒光貴峰・町田玲子

The influence of traditional activities on child raising in local community.
～ A case study in Shimogasa-cho, Kusatsu-shi ～

MISA NAGAI*, TAKAMINE KUROMITSU, REIKO MACHIDA

Abstract : In recent years, they have been doing activities in their communities to improve the environment for children. The purpose of this research is to make it clear whether they are having a good influence on bringing-up children. Actually I decided to focus on the traditional entertainment of “Sanyare Dance” in Shimogasa-cho, Kusatsu. The method of my researching consisted of giving questionnaires to people and interviewing them, from August, to December, 2002.

The results are as follows.

Through this activity in the community.

- (1) Children are eager to make good relations with people of all ages.
- (2) They became more interested in their community.
- (3) Parents tend to believe that taking part in “Sanyare Dance” is a good influence on their children.

What they have to do to improve this activity from now or are to make it possible for girls to take part in their activity at every opportunity, and to make it easier for new comers to make contact with this activity. Joining an activity in the community is necessary from the point of Housing Education in accordance with the process of growing up. And I also think my research will be helpful for the purpose of improving the standard of living today's society.

(Accepted September 9, 2003)

1. 研究の背景と目的

近年、子どもを取り巻く地域環境の悪化が社会問題になっている。本来、子どもは小学生にもなると地域の大人や異年齢の仲間と囲まれ、自然に育っていくものである。しかし今日、住民間のつながりが弱まり、地域で子どもが育つことが難しい環境となっている。

平成14年度4月より学校完全5日制が実施され、休日の子どもの過ごし方が問題視されるなか、子どもを健全に育てるために地域では様々な取り組みがなされている。その主体には、行政、学校、親の立場である人たちがあげられるが、本研究では、親の立場で子どもをみている人たち、すなわち地域住民主体による活動例を取り

上げた。

滋賀県草津市下笠町には、氏神である老杉神社にサンヤレ踊りという地域独特の伝統芸能が伝えられている。本研究では、下笠町の住民が地域の子どもたちにこの伝統芸能に毎年参加させ、地域に残すための伝承活動を行っている点に着目した。

サンヤレ踊りは、毎年5/3の祭りに奉納されるが、事前に3ヶ月程度の練習が行われる。練習は、下笠町に住む大人や子どもが集まって行なわれるので、互いに触れ合うきっかけとなっている。子どもの役者(子役)は、町内に住む3歳から小学生までの約7名の男児である。子役は毎年交替し、子役を経験した人が大人になると町内の子どもを指導する、というように引き継がれている

*公文式南大萱教室

Studying Place “Kumon” in Minami Ogaya

ものである。

本研究では、小学生以上の年齢にある子どもたちに対して、この伝承活動はどのような影響をもたらしているか、について考察する。具体的には、①子ども同士や子どもと大人とのつながりが深まっているか、②子どもが、自分の住む地域に対する関心を深め、愛着を持つことができるようになったか、③親たちが、子育てに効果的であると感じているか、について明らかにすることが目的である。

既存の研究^{11)~17)}では、地域活動を通じての子育てを題材にしたものは多いが、伝承活動に着目した例は見受けられない。子どもたちが地域に根づいている活動に何らかのかたちで関わることは、地域に対する関心を深め、地域の今後について考えるきっかけとなると思われ、子どもに対する住教育的効果が期待できると思われる。

2. 研究方法

2-1 ヒアリング調査の概要

下笠町内における子どもをめぐる地域環境の様子、サンヤレ踊り保存会の状況、伝承活動と地域での子育てとの関わりについて知るため、訪問（一部、電話）によってヒアリング調査を行った。ヒアリング対象者は、サンヤレ踊り保存会前会長他関係者の方々、老杉神社、笠縫学区公民館、笠縫小学校の代表者の方々、下笠町自治連合会会長、踊りの練習の付き添いに来ていた子役の母親数名である。調査期間は、主として2002年8月6日～10月20日である。

2-2 アンケート調査の概要

下笠町の11地区全てを調査の対象地として、全世帯を訪問の上、調査票の配布を行い、郵送で回収を行った。配布数は740であり、有効回収数220、有効回収率29.7%を得た。アンケートの回答者についてはとくに指定しなかった。世帯内の子どもの状況に関しては、親による回答を得た。調査期間は2002年11月9日～12月4日である。

3. 調査対象の概要

3-1 調査対象地の概要

下笠町を含む笠縫といわれる地域（現在、笠縫小学校区に該当）は、草津市の西部にあり、琵琶湖の南東部の沖積平野に位置している。笠縫は、天井川で有名な草津川の下流にあり、海拔90m前後、気候は温暖で穀倉地帯である。現在の下笠町である下笠地域には、古代より人々が住みついていたといわれ、馬場遺跡（弥生時代）、七条浦遺跡（弥生時代）等、石器時代の遺跡が存在する。

町内は、馬場、下出、井の元、市場、松原、北出、寺内、南出、小屋場、浜、松陽台の11地区に分かれている。総面積は3.55km²、人口3228人、世帯数は908世帯（2002/10/1現在）であり、全地区から組織されている

下笠町自治連合会が存在している。

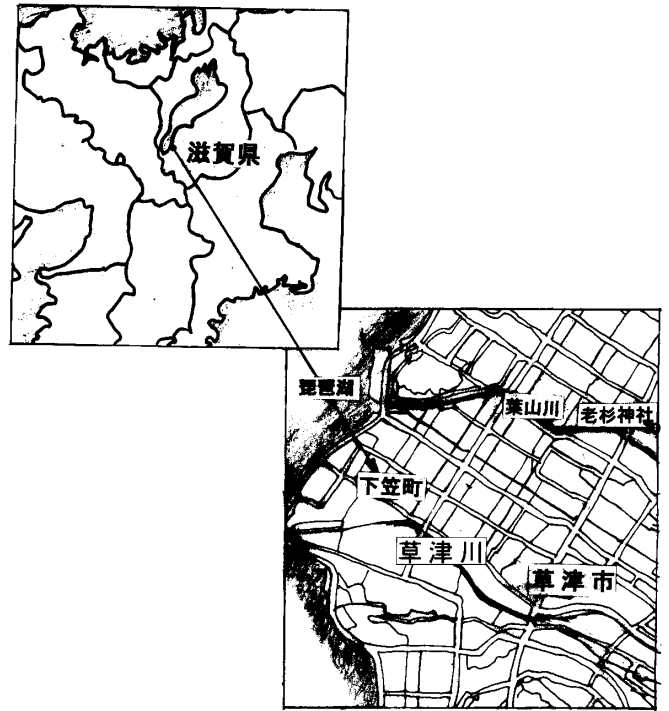
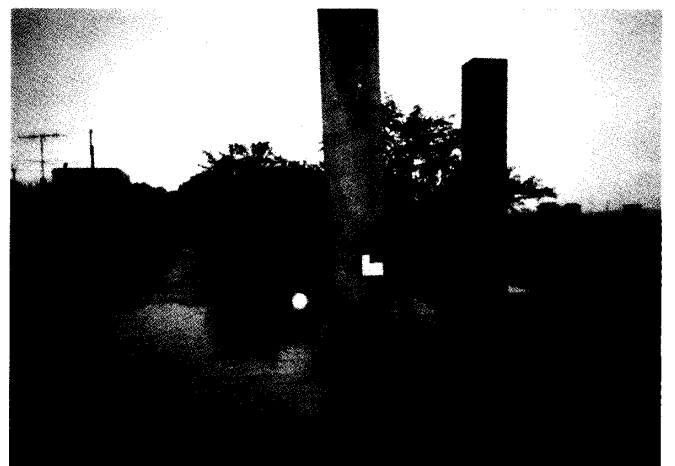


図1 下笠町の位置図(葉山川と草津川に挟まれた一帯)

サンヤレ踊りは下笠町の氏神、老杉神社に伝わる踊りであり、室町時代の風流を伝えている。約20名の男性（大人役）、男の子達（子役）が、「サンヤレ」という囃子詞に合わせて踊るものである。



老杉神社の鳥居とそれに続く参道。参道に沿って神社の氏子の家々が並んでいる。右手に周囲の田園風景が見える。



2002年10月20日（日）草木祭 老杉神社境内にて
太鼓打ち（子役）と太鼓受け（大人役）の様子

3-2 サンヤレ踊りの保存会活動の概要

下笠町が位置する草津市では平成10年度より「地域協働合校」が実施されている。これは、地域内の大人と子どもが共に知恵を出し合い、地域学習社会を築くための事業である。サンヤレ踊り保存会の活動はこの事業が対象としている地域活動の一つである。

サンヤレ踊りと子どもみこしは戦前まで活発に行われていたが、戦争により一時中断された。その後後継者の減少に危機感が持たれ、昭和55年に保存会が結成されて、踊り、みこし担ぎ（大人みこし、子どもみこし）共に復活した。保存会活動の目的は、踊りの後継者を育てること、地域における青少年の健全育成を促すこと、また、新旧住民の交流を促すこと、とされている。【『民族芸能73 第42回民俗芸能大会特集』（1992年発行）より】

子役の子どもは、保存会が各地区の自治会に依頼して集められることになっている。戦前は、親が競ってでも参加させようとした踊りであったが、最近では子役を集めるのに苦労しているという。

3-3 調査対象世帯の概要

調査対象世帯の世帯主年齢、世帯主職業、家族の人数、家族の型、下笠町に住み始めた時期については、下記の通りである。なお、%値は有効回収数220から不明を除いた値を100%としている。全国平均は、世帯主の年齢、世帯主の職業については平成10年、家族の型については平成12年の統計結果である（総務省統計局・統計研修所編「日本の統計 2003」による）。

- ①世帯主年齢：40歳代（21.8%）、50歳代（27.7%）、60歳代（25.0%）が比較的多い。全国平均と比べ、世帯主が高齢である世帯の割合が高い。【全国平均：50歳代（20.2%）、60歳代（21.7%）】
- ②世帯主職業：正社員・正職員（54.0%）、無職（14.5%）、自営業（13.6%）、農業（9.1%）の順に多い。全国平均と比べ、正社員・正職員の割合が低く、農業の割合が高い。【全国平均：正社員・正職員（61.9%）、農業

- （3.1%）】
- ③家族の人数：4人（28.2%）、5人（23.6%）、6人（14.5%）の順に多い。全国平均と比べ、大家族が多い。【全国平均：4人（16.9%）、5人以上（11.5%）】
- ④家族の型：核家族（41.8%）、三世代家族（37.7%）が大半を占める。全国平均と比べ、核家族が少なく三世代家族が多い。【全国平均：核家族（58.4%）、三世代家族（13.5%）】
- ⑤下笠町に住み始めた時期：戦前より下笠町に住んでいる家族が多い。（68%）

4. 調査結果及び考察

4-1 サンヤレ踊りの伝統を守り続けたい意識

「サンヤレ踊りの伝統を守り続けたいと思うか」の質問に対して、「思う」を伝承活動に積極的な層とし、「思わない」「わからない」を消極的な層とした場合、前者が79%（163/207）、後者が21%（39+5/207）であり、積極層が大半を占めている。とくに、積極層の割合は図2～5に示す通り、世帯主年齢が50～60歳代に比較的高く（図2）、世帯主が「正社員・正職員」層に比較的低い（図3）。また、三世代世帯層（図4）、および戦前に住み始めた層（図5）の占める割合がとくに高い。サンヤレ踊りの伝統を守り続けるためには、とくに居住年数の差などの影響による意識のギャップをいかに縮めるか、が今後の課題の一つと言える。

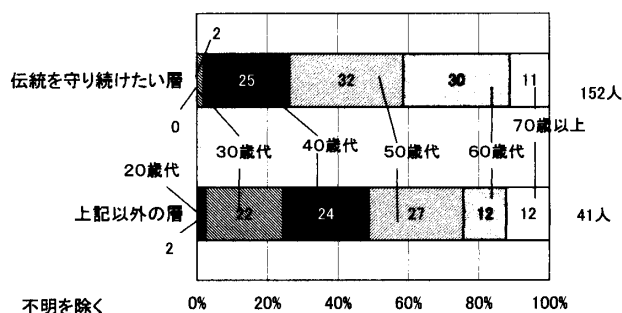


図2 サンヤレ踊りの保存意識—世帯主の年齢層別比較
(グラフ内の数字：%)

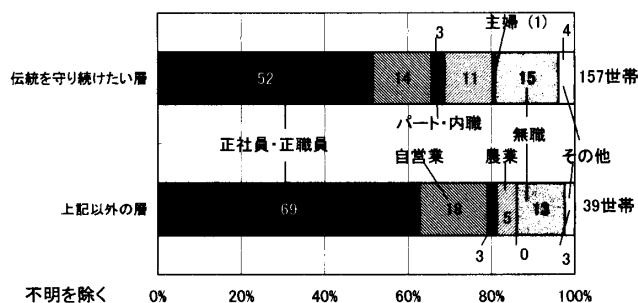


図3 サンヤレ踊りの保存意識—世帯主の職業別比較
(グラフ内の数字：%)

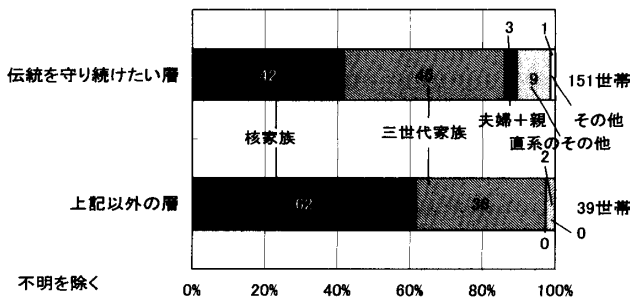


図4 サンヤレ踊りの保存意識—家族の型別比較 (グラフ内の数字：%)

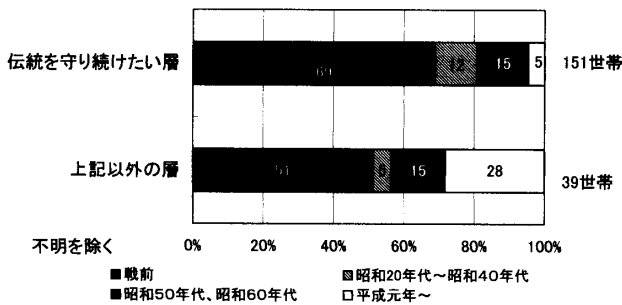


図5 サンヤレ踊りの保存意識—下笠町に住み始めた時期別比較 (グラフ内の数字：%)

4-2 下笠町住民と伝承活動

伝承活動の内容には、祭りへの参加と準備 (練習)、および保存会活動がある。

1) 役の経験者が世帯構成員である場合の影響

220世帯のうち、保存会活動を過去に経験した人、あるいは現在行っている人がいる世帯は75世帯 (34.1%)である。子役経験者のいた世帯は72世帯 (32.7%)であり、大人役経験者のいた世帯は75世帯 (34.1%)である。

保存会活動に関わったことのある人のいる世帯層を「保存会関わり有」、そうでない世帯層を「保存会関わり無」とし、子役経験者のいた世帯層を「子役経験者有」、そうでない世帯層を「子役経験者無」とした場合、保存会活動と関わりのある世帯の方が、子役経験者有の世帯の割合が高く (図6)、大人役経験者有の世帯の割合が高い (図7)。祭りの役の経験者が家族構成員にいる世帯は、保存会活動に関わる傾向がみられる。

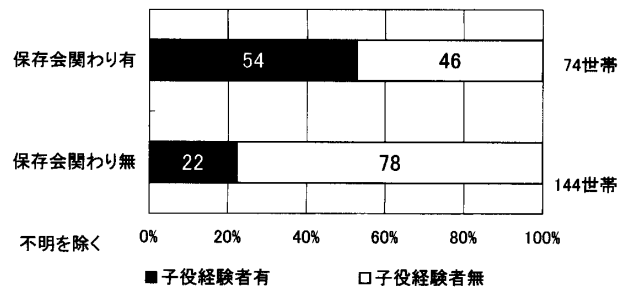


図6 保存会活動との関わり—子役経験者有無別 (グラフ内の数字：%)

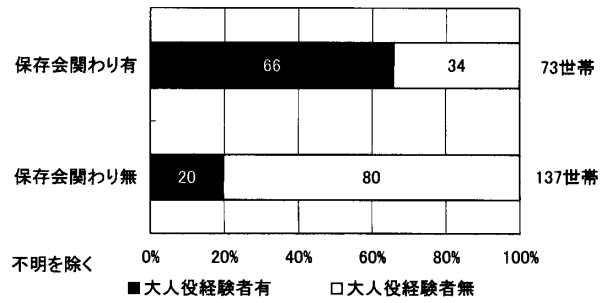


図7 保存会活動との関わり—大人役経験者有無別 (グラフ内の数字：%)

なお、サンヤレ踊りの子役は男の子に限られていることから、「保存会関わり」の有無と、世帯構成員における男の子の有無との関係を調べたが、顕著な結果は得られなかった。

2) 地域の子どもたちを叱ることについて

「近所に言いたいことを気軽に言い合える大人がいるか?」という質問を設けたところ、「いる」(76%, 160人)が、「いない」(17%, 36人)、「わからない」(7%, 15人)に比べて、とくに高率であった。(％は不明を除く210に対する割合)。また、「近所の子どもに対して遠慮なく叱ることができるか?」という質問では、「はい」(51%, 108世帯)が、「いいえ」(25%, 53世帯)、「わからない」(24%, 51世帯)に比べてとくに高率であった。(％は不明を除く212に対する割合)

住民の半数以上が、近所の大人や子どもに対して打ち解けて接している様子が見える。

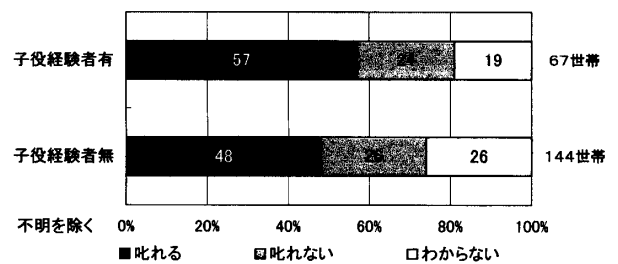


図8 近所の子どもを遠慮なく叱ることができるか—世帯における子役経験者の有無別 (グラフ内の数字：%)

図8に示すように、子役経験者のいる世帯層がいない世帯層に比べ、近所の子どもに対して遠慮なく叱ることのできる大人の占める割合が高い (57%)。また、「近所に言いたいことを気軽に言い合える大人がいるか?」で「はい」と答えた層は、保存会活動の経験層が、経験のない層に比べて、より高率である (図9)。また、保存会活動経験者のいる世帯 (不明を除く74世帯) の5割弱が、活動をしていて良かったことについて「地域の大人達と交流できた」ことをあげている (図10)。

以上より、下笠町内の大人の半数以上が近所の子どもに対して気軽に叱ることができると思っている背景には、大人同士が気軽にものを言い合える関係があって、そのために子どもに対しても遠慮なく叱ることができるものと思われ、その一因として保存会活動の存在が考えられる。

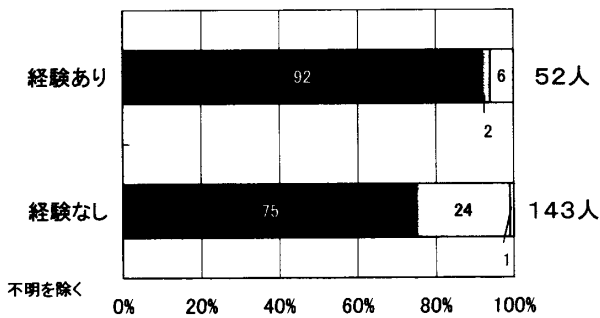


図9 近所に言いたいことを気軽に言い合える大人がいるか保存会活動経験の有無別 (グラフ内の数字：%)

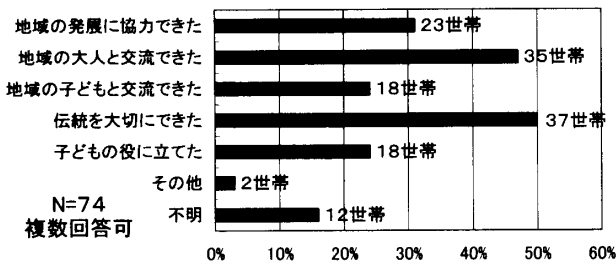


図10 保存会活動をしていて良かったこと

3) 小・中学生たちの地域での友達づくり

当地域には小・中学生がいる世帯は28%を占めるが、各世帯の年長の小・中学生に対し、「近所に学年の違う友達がいるか？」の質問を設けた。その結果、男子が女子に比べ、「いる」と答えた子どもの割合が高く、「いない」と答えた子どもの割合が低い結果となった (図11)。

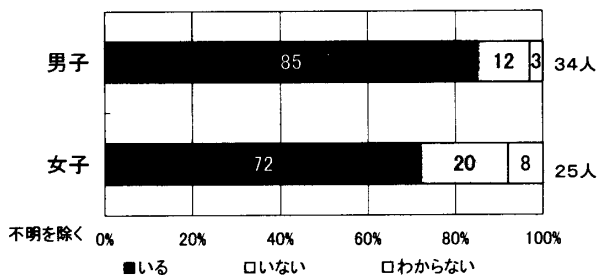


図11 近所に学年の違う友達がいるか—小・中学生男女別比較 (グラフ内の数字：%)

なお、回答の得られた小・中学生の男女比は、およそ7：5であった。子役の経験有りの小・中学生は、下笠町の小・中学生全体の24%であったが、子役経験有りの子どもは、経験無しの子どもに比べて、「近所に学年の

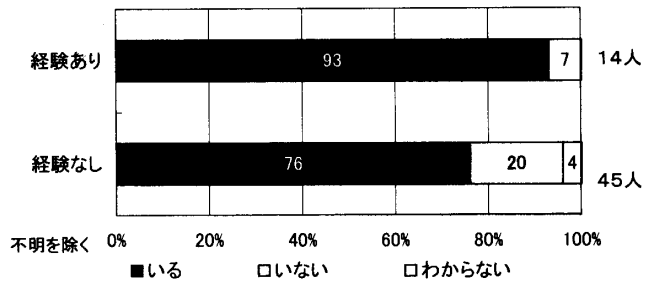


図12 近所に学年の違う友達がいるか—小・中学生子役経験有無別 (グラフ内の数字：%)

違う友達がいる」層の割合が高く、「いない」層が低い (図12)。これは、子役の経験が地域内の異年齢の子どもと触れ合うきっかけとなり、近所内での仲間づくりを積極的に行えるようになったためと思われる。

4) 小・中学生にみられる地域に対する愛着心

各世帯の年長の小・中学生に「下笠町のことが好きか？」という質問をした。子役経験のある子どもは、経験のない子どもに比べ、「下笠町のことが好き」と答えた子どもの割合が高く、「わからない」と答えた子どもの割合が低い (図13)。小・中学生の地域に対する愛着心は、子役経験によって自分の住む地域について思いを深めることになるため、その気持が「好き」につながっているのではないかとと思われる。

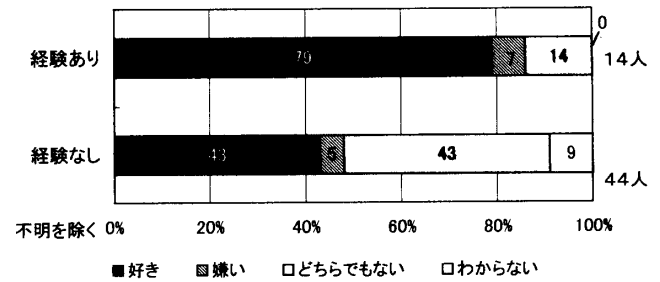


図13 下笠町が好きか—子役経験有無別 (グラフ内の数字：%)

5) 地域における子育て意識とサンヤレ踊りへの参加

子どもをサンヤレ踊りに参加させたきっかけでは、「人に頼まれた」が7割弱をしめており、子育て効果をきっかけの段階で期待する意識は比較的低いものであった (図14)。しかし参加させた後の意識では、子どもに及ぼす効果的な内容に関する割合が高くなっている (図15)。

子どもをサンヤレ踊りに参加させた経験がある世帯のうち、その子どもが現在高校生になっている10世帯に対して、踊りに参加させたきっかけと参加させて良かったことについての意識の変化を調べた。なお、高校生がいる世帯は下笠町では計35世帯である。

高校生については、「伝統文化に触れることができた」

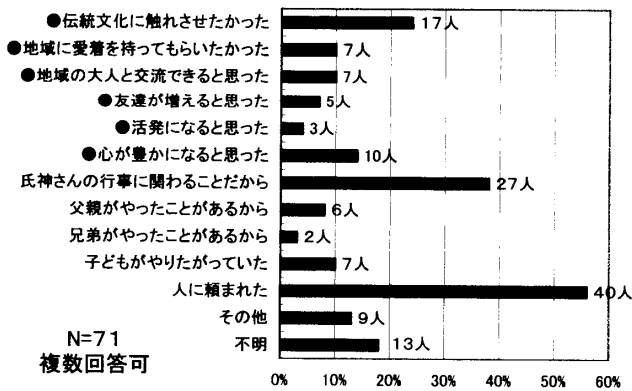


図14 サンヤレ踊りに参加させたきっかけ（子育てに関わりのある項は●で示す）

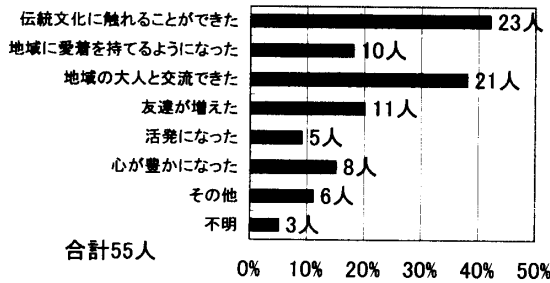


図15 サンヤレ踊りに参加させて良かったこと

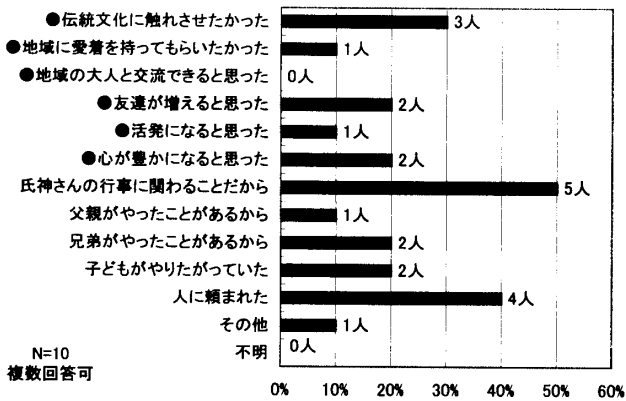


図16 サンヤレ踊りに参加させたきっかけ（子育てに関わりのある項を●で示す）—高校生の場合

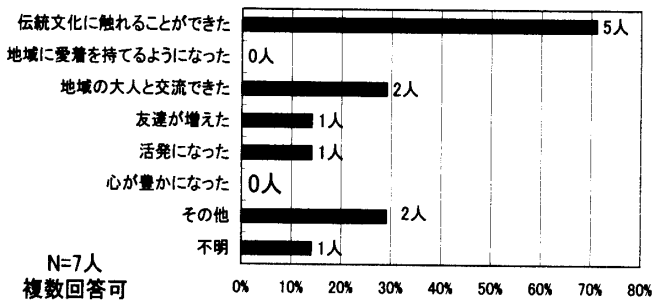


図17 サンヤレ踊りに参加させて良かったこと—高校生の場合

がとくに高くなっているが、「地域に愛着を持てるようになった」はゼロである。先述の4)において、サンヤレ踊りへの参加は地域への愛着心を育てるきっかけになると述べたが、小・中学生段階から高校生段階になると「伝統文化に対する思い」は持続するものの、地域に対する愛着心は必ずしもそうではない。小・中学生段階で地域と学校とで培った地域意識が、高校生段階においても維持され、高められるような方法が必要であると思われる。

5. まとめ

当地域独特の伝統芸能であるサンヤレ踊りの伝承活動は、①子どもが、近所で異年齢の仲間づくりを積極的に行えるようになってきていること、②子どもの、地域への関心・愛着が育っていること、において評価する世帯層の割合が高く、①、②より、子育て効果があると言える。

今後の課題としては次の3点がある。一つは、少子化対策としてのあり方、二つ目に、新旧住民の地域共生に向けてのあり方、三つ目に、地域意識を高めるための教育についてである。

①サンヤレ踊りは男の子を主役にした踊りとして受け継がれており、女の子は踊りの主役にはなれないことになっている。そのため、アンケートの自由記述では、「子役の子どもを集めるのがたいへんである」「女の子も参加できる踊りになってほしい」という意見がみられた。今後は、男女の区別なく踊りの主役になり得るような伝統芸能として、サンヤレ踊りの保存会が働きかけられることがのぞまれる。

②サンヤレ踊りの保存意識に新旧住民で差がみられ、自由記述においても「新しい住民は伝承活動に馴染みにくい」という意見がみられた。新しい住民が関わりやすくなるための方法についての検討がのぞまれる。

③地域の伝承活動が小中学生の子どもたちの地域愛着心の育成に関わっている背景には、小中学校における地域学習と連動していたことが考えられる。当地域だけでなく一般的に言って、小中学生段階で体得した地域への関心が、高校生の段階で薄らいでいくことがないように、高校生の地域意識向上のための教育の機会がつけられることが今後必要であると思われる。

6. 謝 辞

研究を進めるにあたり、地域に住む様々な方に本当にお世話になりました。調査過程で、無理なお願いを聞いていただくなど、ご迷惑をおかけしましたことを反省しています。お世話になったサンヤレ踊り保存会前会長、現会長他関係者の方々、下笠町自治連合会会長、老杉神社、笠縫小学校、笠縫公民館の各代表者、子役の母親の方々から心からお礼を申し上げます。

【参考文献】

- 1) 『老杉神社の由来と頭屋行事』（サンヤレ踊り保存会前会長・山元末吉氏所蔵）
- 2) 『湖南のさんやれ踊り』（サンヤレ踊り保存会前会長・山元末吉氏所蔵）
- 3) 草津市教育委員会 『草津のサンヤレ踊り調査報告書一（本編）』 2003年
- 4) 草津市教育委員会 『草津のサンヤレ踊り調査報告書2（資料編）』 2003年
- 5) 『民族芸能73 第42回全国民族芸能大会特集』 1992年
- 6) 『下笠さんやれ踊り保存会だより』（1992年度版～2003年度版）
- 7) 『第九回学生懸賞論文作文入賞作品集』 1999年
- 8) 萩原秀三郎 『図説 日本人の原郷』 1990年
- 9) 栗東歴史民族博物館 『企画展 まつり 祭り 祭礼』 2001年
- 10) 草津市史編纂室編 『草津市史』 第一巻～第七巻
- 11) 伏見のまちづくりをかながえる研究会 『子どもの生活空間研究グループ 『子育ての町・伏見—酒造と地蔵盆—』 1987年
- 12) 中島明子 『子育ての場のいまを見る』 西村絢子 『地域と子育てネットワーク』 高村昌祐 『神社と公園と住民と子ども』 [建築とまちづくり241号 特集：子育てと地域での助け合い（1997年より）]
- 13) 『保育白書 2000年度版 特集：現代子育て事情』
- 14) 三矢勝司，延藤安弘 『地域の自主サークルがまちづくりワークショップを实践する意味—名古屋市緑区の子どもの遊び研究会「どんぐり」の成果』 日本建築学会大会学術講演梗概集1998年9月
- 15) 安丸裕子，大垣直明 『札幌市手稲区のまちづくりに関する研究 手稲夏まつりにおける「ちょうちん」によるしかけⅠⅡ』 日本建築学会大会学術講演梗概集1994年9月
- 16) 梶木典子，渡瀬章子 『プレイリーダーのいる子どもの遊び場に関する研究 「雑創の森プレイスクール」（京都府田辺町）の調査事例（その1）（その2）』 日本建築学会大会学術講演梗概集 1997年9月
- 17) 高橋博久 『子どもを作業主体としたワークショップの可能性について—名古屋・仲の町公園での実践から—』 日本建築学会大会学術講演梗概集1993年9月